

総合計画審議会 第2回 第2部会

日時：平成18年7月20日（木）午前9時から

会場：市役所本館6階 第3委員会室

（伊藤部会長）

ありがとうございました。それでは、人口の部分を除きまして、追加資料のご説明を含めて本日と次回にご検討いただく内容につきまして、二人の部長さんの方からご説明をいただいたところでございます。それでは、これから早速、お聞きになった内容につきましてご質問、ご意見を出していただきたいと思っております。なお、ご意見をいただく場合に、40ページまで一括という幅が過ぎるでしょうから、相互に関連するところがございますけれども、区切ってお聞きした方がいのかと思います。

まず、はじめに時代の潮流の認識の仕方はどうだろうかということが一つございます。これは8ページ頃までございます。次に構想につきまして、これは11ページから20ページまで、そして3番目は基本計画についてということで23ページから40ページまで、この大きく三つくらいに区切りたいと思っておりますが、いかがでしょうか。それでよろしければ、そういう区切り方でご意見を修正した方がいのではないかとか、あるいは加筆するべきではないかというものを含めてどんどんお出しいただきたいと思っております。それらのご意見につきましては、事務局の方で後で整理させていただいて、次回さらにもう一回それを出していただくということにさせていただいて、それらを次回見ていただいて、最終的にそれでこの部会の意見とするかどうか、さらにもう一回ご審議をいただくということにしたいと思っておりますし、さらに実施の段階で考慮する事項とするかどうかと、そのほか意見はないかというようなことを決めてまいりたいと思っております。およそそんなふうに進めてまいりたいと思っておりますが、早速、まず5ページから8ページにわたっての時代の潮流の考え方、この部分についてお気づきのところがございましたらお出しいただきたいと思っておりますが、いかがでしょうか。辻さん、どうぞ。

（辻委員）

ここだけではない、時代の潮流から始まって、その後ずっとだと思うのですけれども、経済の視点がだいたい弱いというのを全体を通じて感じました。特に生産者側の経済がまったく弱いと思います。それが底流にあるわけです。どこかに書いてありますように、生産する経済というのは雇用を生むわけです。有効需要を通じて消費を生むわけです。さらにそれが財政収入を生むわけです。そういうものに対する記述、認識があまり見られないです。従って、産業構造に対するデータもないし、貿易に関するデータもないし、財政に関するデータもないということになって

いるのではないかと思います。これに関しましては、皆さんおそらく読まれたと思いますけれども、新潟県が出しております地域経済産業分析レポート 2004 年版というのがありまして、これにはかなりの部分を背負って、政令指定都市に向けた新潟市の人口と経済の現状分析ということで、非常に大きな分析がしてございます。もちろんデータもばっちりついております。ですから、こういうものを使うと。ちょっとデータが古いのです。人口も非常に詳しいのですけれども、例えば産業構造、産業構成というものがここにありますが、新・新潟市の産業別構成比平成 13 年度ですから 5 年ほど前ですけれども、一番多いのはサービス業 20.9%、次が卸小売業 15.4%、不動産業 14.4%、製造業 11.1%となっておりまして、農林水産業は 1.4%、そういう現状である。それにもかかわらず非常に多いサービス業や卸小売業、不動産業というものが主要産業なわけですけれども、それに関する記述がここにはほとんどない、それが経済ということでありまして。

それから、時代の潮流ということになりますと、これは全国的な動きであり、新潟県全体の動きであるということ、これもいろいろなことが書いてございます。時代の潮流一つ、経済の分野で県内総生産という項目では、年々構成比が上昇しているサービス業、一方、農林水産はどんどん減っているという記述が全体の動きとしてあるわけです。そういうふうにしたのは、非常に立派なレポートが県からは出されているのですけれども、こういうデータの説明はないですし、経済の視点は重要なのではないかと、それに併せて財政も入れていただきたいと、まさか夕張市のようにはならないでしょうねということ、今から考えておかなければいけないわけでありまして、そういうことをお願いします。美しい言葉は結構です。非常に美しい耳障りのいい言葉をちりばめているのですけれども、だからどうするということにはならないですから、もうちょっとシビアにいかうではありませんかというのが私の意見でございます。

(伊藤部会長)

ありがとうございました。どうぞ。

(五十嵐委員)

私はあと 15 分くらいで中座させていただくのですけれども、逆に生活者の負担の視点が出ていないというのを感じました。というのは、他の都市に比べて競争力をこれからつけていかなければならないという状況の中で住みやすいというのは何かというと、暮らすのにコストが少ないという点が非常に大きいと思うのです。しかしながら、私は税理士もやっていますので納税の相談に行くと、個人で営業されている 250 万くらいの所得の方の社会保障費関係の負担は非常に大きいものがありまして、国民年金とか健康保険とか介護保険とか、諸々の費用を加えていくと 60 万くらい、つまり 250 万稼いでも 60 万社会保険及び税金で持って行かれるというようなところで、生活がしやすいということは住んでいてコストが余りかからない、それから万が一、介護の状況になったとか、そういう時にどれほど自分はコストがかかるのか、余命から計算して長生き

することにどのくらいリスクがかかるのかというようなことに対しての安心感がないと、人間というのはなかなか安心して、それこそ豊かな生活を享受できるところにはいかないのではないかと思います。そういった意味で、生活者の負担をなるべく軽減する、今後はどうしても少子高齢化ということであれば各自の負担は上がってくる可能性はあるわけですので、それに対してどのような対策をして、あまり負担のかからないような、あと子育てもそうだと思うのですけれども、負担のかからないような仕組み、目標、そういうものがこういうプランの中に入っている必要があるのではないかと思います。

先ほど農業が経済的な部分でみると、非常に下がっているというお話が辻委員の方からありましたけれども、サービスの中を見ると、飲食というのは周りにある農生産物を使ってサービスを行っているという部分ですので、単純に農産物だけがどうかという見方ではなくて、農産物関連というようなサービスも視点の一つとしては必要なのかなというふうに、逆に私はとらえております。

(伊藤部会長)

ありがとうございました。辻委員の方から経済の指摘がすっぱり抜けているのではないかなというお話がございましたけれども、これは時代の潮流のとらえ方ということで、違った切り込みをしているために敢えて避けたというか、触れていなかったという意図があるのでしょうか、事務局の方はいかがでございますか。

(事務局)

確かに辻委員の方から経済の視点というのに弱いというご指摘がございました。大変貴重なご意見をいただいたところでございます。こういった都市像をまとめていく上においてというか、潮流なり都市像なり、こういった総論的なことをまとめていく上においてのくくり方というのが一ついるのだらうと思っております。そういった中で経済というくくりをしていないというのは事実だらうと思っておりますので、そういった面では弱さというのが感じられるのかなと思っております。

ただ、経済的な面で言えば、例えば潮流で言えば、7ページの4番目の国際化と都市間競争の中で若干触れさせていただいているという部分があるかと思いますが、確かにこれだと辻委員の言う形の鋭さに欠けている部分があるかと思いますが。そういった面を先ほどご紹介いただきました県の資料等も見させていただきながらどのように補完できるか、あるいはさらに別立てにすべきなのかどうか、もうちょっとご議論いただければと思っております。

もう一つ、財政見通し、夕張のようにならないだらうねというご指摘がありました。確かに政令市に移行しますと財源も増えますから、当然これまでの中核市といいますか、一般市以上に増えてくるわけでございます。特に県から1,113もの移譲事務を得て、それでいろいろなことがで

きるという自立性が出てくるわけでございますが、それだけの負担がかかるというものでございます。また、政令市になると区政をひかなければ行けませんので、新潟市の場合は八つの区を設けるわけでございます。これがこの総合計画を立てる上でも非常に大きな要素になっているわけですけれども、そういった八つの区を設けるということは、行政効率の意味から言っても負担が多くなるという、そういった増加部分が見受けられます。

一方で、国、県からこれに見合う財源も移譲されております。また、所要の財源措置も一般市に比べて政令市は別の考え方を制度として持っていていただいております。いわゆる地方交付税の算定においても、所要の財源措置というものが別の見方でなされるという形になっています。また、財源の移譲につきましては、分かりやすいので言えば宝くじの収益金、一般市には分配されませんが、政令市には分配されます。こういったものを県と協議しながら市に分配されてくるということでそれに見合う分、それから一般的にガソリン税と言われている分、これもすべて政令市に移行されてくるというプラスの面もありますので、こういった収支を見通しという形の中で見てみますと、単純に収支しますとプラスの方向で見受けられます。

ただ、これは当然、政令市になりますと、それにふさわしい都市基盤の整備をしなければなりませんし、また、市民サービスについても向上を図っていかねばいけません。今、五十嵐委員が言われたような事柄もそういった部分に含まれてくるかと思いますが、そういった面の向上を図るというものを照らし合わせてみますと、収支は均衡しているのかなと思っているところでございます。単純に比較しますとプラスになりますけれども、ただ、政令市としてのそれなりの形を整えなければいけない、そういったことも含めていくと、収支均衡するという見通しを立てております。ただ、細かい予算のものにつきましては、それぞれ事業を積み上げていくものでございますので、今はまだそこまでは積み上げていない。概ねの政令市になるということで財政見通しを照らしてみると、そういうことになります。なお、この記述につきましては、当然財政見通しがベースになるものですので、いつかどこかでこれに挿入していかねばいけませんということで、今日は口頭でご説明ということでお許しいただきたいと思っております。

(事務局)

それと、ちょっと補足させていただきます。私は冒頭に各委員からの要望に応えまして、今日は資料を二つお付けしていますが、もう一つ、実はデータも提供してくれという要望がございまして、私どもある程度蓄積しているものがありますので、そこには経済の指標もございまして、それを今見やすい形にまとめ直しておりますので、次回までにはまとめ直したものをお渡しできると思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思っております。

(伊藤部会長)

経済の部分についても大変重要な事項であるので、時代の潮流の中に入れ込んでいくべきでは

ないかというご指摘がございましたので、今、石井部長の方からも検討させていただきたいということでございましたので、次回以降、その扱いについてどの辺まで具体的なところに行くのかという問題もございますけれども、触れていくべきなのかなという感じを持っていますが、次回また検討させていただきたいと思います。

それでは、五十嵐委員の方からもご指摘がございましたけれども、皆様方もっともなご意見なのですが、中出先生が到着されましたので、ペンディングにしておりましたお手元の追加資料でございますが、2の将来人口の推計につきまして早速事務局の方で、先ほど石井部長さんからご説明いただいたものに補足させていただく形になろうかと思いますが、ご説明をお願いいたします。

(事務局)

それでは、お手元の資料に基づきましてご説明いたします。本冊の方は27ページになります。冒頭に説明がございましたように、この趨勢が将来とも続くというのが黄色で、政令市移行を機会にしまして、一定の政策を講ずることによって赤いラインにもっていくというものでございますが、この黄色がベースになるわけでございます。それで、資料2を見ていただきたいのですが、1.推計の方法になります。コーホート要因法という推計方法でございますが、現在の新・新潟市の人口を5歳階級ごとに分けまして、その5歳ごとが国勢調査の5年ごとにどういう変化があるか、どういう移動があるかという率を順次掛け合わせて、5年後の推定をしていくというものでございます。主な変動の要因が、ここの1行目でございます出生率・死亡率・移動率というものを分離して推計しております。その2段落目ですが、今ほど申し上げたように移動率の趨勢が今後も変わらないものとして推計したものが、27ページの黄色いカーブでございます単純推計人口というものでございます。基本的に平成7年及び12年の国勢調査をベースに推計しておりますが、推計の途中に17年の国勢調査の速報版が出ましたので、17年の速報版と乖離していると少し理解しがたいものになりますので、その部分は17年速報版に合わせるように調整しております。

それと2番目でございますが、将来仮定値の設定というところで(1)出生率でございます。下の表を見ていただきたいと思いますが、下から3行目の合計特殊出生率、新潟市の出生率の数値をこれをもって用いたということでございまして、平成12年から17年、実際はデータとして12年から16年までしかございませんでしたけれども、その平均で新潟市が1.25の合計特殊出生率をベースにしておりまして、あと5年ごとに1.25が1.23、1.24と変化してまいります。この変化については人口問題研究所の国の趨勢、変化率をそのまま新潟市の1.25に掛け合わせて、国の変化に合わせております。

2ページ目でございますが、生残率、死亡率の逆でございます。1引く死亡率になります。

これについては新潟市のデータがございませんでしたので、新潟県の数値を適用いたしました。男女の出生の比率でございますが、これも県のデータで 104.8 対 100 を用いました。こういうことで単純推計、現在の趨勢で進んだらということで黄色いカーブを描くものを推計、これをベースにしております。

それで、資料の 2 ページ目の 3 . 将来の男女年齢 5 歳階級別移動率の考え方というところで、今度は赤いラインの考え方でございますが、着目しましたのは政令市になって交流人口の増加、あるいは産業の活性化に務めることによって雇用の場を創出したしまして、それによって若者が県外に流出するものを一部食い止めると、あるいは新潟市、新潟市周辺で生まれた者が首都圏や県外に出ている人たちの U ターン、あるいは J ターンを促進するというところを一つのポイントといたしまして推計したものでございます。

その具体的な考え方でございますが、政令市のうち札幌、仙台、広島、福岡、いわゆる札幌仙広福の都市型産業の構成比に着目いたしました。先ほど新潟は都市型産業が随分増加しているという話もありましたが、札幌、仙台、広島、福岡に比べますと、まだ従事者の割合が低い数値になっておりますので、その割合を札幌仙広福並みの産業構造にしまして、都市型産業の従事者の割合を 4 都市並みにもっていくというところで雇用の拡大の数値としております。

都市型産業でございますが、一番下にゴシック体で書いてございます情報・通信業、卸小売、金融、保険、不動産、飲食、教育等でございます。

3 ページをめくっていただきたいと思いますが、段落で二つ目、都市型産業従事者数の増加というところがありますが、先ほどの札幌仙広福との差、都市型産業の従事者構成率が 9.84 ポイントの差がありましたので、新潟市の就業者人口にこの 9.84 ポイントを乗じますと、3 万 3,200 人という数字が出てまいります。

それを産業分類ごとに見ますと以下のとおりなのですが、大きく次の段落、本市内での新規就業者のところにはいきますけれども、33,000 人の新規雇用が発生するという仮定の中で、実際市外から全部新潟市内に住むとは限りませんので、新規雇用分を市外からの通勤が、現在の数値を使っておりますが、約 9 % 市外から来るということで、3,000 人を引いた 3 万人が、新潟市在住者で新規雇用者だという仮定をしました。3 万人すべて外から入ってくるかという、必ずしもそうでないわけでございますが、新潟市内、実は失業者が 1 万 9,000 人ほどございます。そのうち半分の 1 万人が雇用拡大分のところに就業すると、そうすると、3 万引く 1 万の 2 万人が純粋に外から入って来るという考えでございます。2 万人が新潟市内にお住まいで、かつ都市型産業の新規雇用分が 2 万人だということで、U ターン、J ターンというのは、単身赴任もいらっしゃるのかもしれませんが、家族も一緒に新潟にやってくるということ、あと、独身の方は一人で行きますし、新潟の若者が外に行くものを引き留めるのも家族が連れてくるわけではござい

ませんので、それも世帯がないわけですから、その辺を計算いたしまして、2万人に対して平均の世帯員数を2といたしまして、新たな雇用の場の創出によって外から転入してくる家族も含めて4万人の流入を想定いたしました。その4万人をここでは20年、すぐ政令市になっているような政策を講じたところで、すぐに効果が出るわけではございませんので、少しずつということで20年にわたって4万人の方が新たに流入してくるということで、2千人×20年間で4万人と計算してございます。

もう一つ、(2)でございますが、団塊の世代を中心としてUターンあるいはJターン、Iターンというもので、一つの本市の総合計画のねらい目が田園型の拠点都市ということで、田園性と都市性の両方享受できるという、新しいライフスタイルに比較的合った都市ではなかるうかということを経済計画の中でうたっておりますが、そういう魅力を高めることによって年間100人、夫婦ということ想定しますと50組100人のUターン、Jターンを見込んでおります。これは全体の数字にしますと非常に小さい割合でございますが、それを加え合わせまして27ページの赤い想定人口にいたしましたところでございます。以上でございます。

(伊藤部会長)

ありがとうございました。それでは、ただ今の説明も先ほどの説明と同じように追加の説明ということで、取りあえず今お聞きいただきました。さっき議論を途中にしておりましたので、戻っていただいて恐縮でございますが、こちらの方はまた後ほど議論いただきますが、時代の潮流というところの議論に戻らせていただきまして、その他、お気づきのところがあればと思っております。五十嵐委員、これから中座だそうですが、その他で何かお気づきのところはございませんか。

(五十嵐委員)

世界の潮流というのも少し入った方がいい、環境問題がすっぱり抜けているのではないかと。温暖化の問題と生物の絶滅していくスピードとか、そういう環境問題が記載されていないのは、ちょっと片手落ちではないのかなという点が気づいたところです。

(伊藤部会長)

ありがとうございました。その他、皆さん方からお気づきの点はございませんか。

それでは、後ほどで結構でございますが、お出しいただくことにして、基本構想についてよろしいでしょうか、11ページから20ページまで。こちらの方で何かこうすべきでないかというご意見、ご質問を含めてお出しいただければと思います。いかがでしょうか。

(辻委員)

先ほど言ったことと関係があるのですけれども、まず国際化があつて、その下に産業があるというのは、構造的におかしいのではないかと思います。というのは、別に国際化でない国内向け

の産業というのは、先ほど言いましたようにサービス業だとか製造業だとか、それが非常に多いわけです。別にうちの会社は国際化ではありません。国内市場向けに商品を作っておりますとか、国内向けが多いと思うのをすべて国際的のアンプレラの中におくというのは、ちょっと無理があるのかなという位置づけです。この五つをやるのだったら、六つ目に活力ある産業のまちというのは、国際化とは別に立てるべきではないかと考えているわけでございます。

(伊藤部会長)

第3のあたりでございますか。

(辻委員)

世界とか日本海とかがあって、その下に産業による活力づくりとあるけれども、別に産業というのは世界とは関係ない、日本海とは関係ないと、実はそれでバリバリやっていますという産業がありとあらゆる部門にたくさんあるわけです。それはそれで育てていかなければいけないし、特にこの場合、首都圏に近いということからくる、農業でもそうですし、農産物でもそうですし、製造業でもそうですし、国内市場を意識したものは非常に多いと思うのです。ですから、これを国際化のアンプレラの中におくことには無理があるのかなと思います。

(伊藤部会長)

ここは、国際化の中でも交流人口というか、交流を通してのまちづくりというものを目指しておられるのかなと、そういう意味では人が集うまち、世界と行き来ができる賑わいのあるまち、そして産業の活力というふうな形で並んでいるのですね。

先ほどの辻委員ではないけれども、きらきらといい言葉が並んでいますので、皆さん方から特にご意見がなければ、次にいきましょうか。

(中出委員)

ここに関してはいいと思うのですけれども、もうちょっと追加してもいいかなと思うのは、どこに入れるのがいいのかというのが難しいのですけれども、やはり3かなと思うのですけれども、日本海交流都市というところで言うと、今世界という時に見ているのは、新潟港と新潟空港を前提にしているのだと思うのですが、日本国内で言うと、これほど高速道路のネットワークが発達している県は新潟県をおいてほとんどなく、日沿道がどこまで延びるかは別として山形の方向を向いていますし、いわきにまで行けば太平洋側に一番近い、それから今ほど言われたように東京に向けても、長岡 250 キロですから 300 キロで行ける、それから青森の物流は東京を避けてほとんど新潟方面を通して大阪の方に行くわけです。

そういうようなことを考えると、非常に高速交通体系の濃度としての役割を有しているところとかなり有利な点で、今後、道州制のことを考えた時に新潟がどこに入るのかわからないというのは、実はそこは逆に言うと、どこもくっつけるということになっていて、その一番



大きなところは実は新幹線よりも高速道路によるものが大きくて、そこで例えば交流というものが生まれるでしょうし、新たな産業というようなこともあると思うので、もう少し国内のネットワークの有利な部分を生かすということが、何とか都市というところの中に入れられないかと思っていたのですが、そのあたりはどういうふうにお考えでしょうか。ただ、この施策の中には何らか書かれていると思うのですが、ここで打ち出しておいてもいいのではないかと思うのです。

(伊藤部会長)

高速道路というのは確かに3本も4本もあるというのは本県だけです。全部通過しているのですか、もう少し止まって。通過しているだけでは意味がないのですけれども、交通渋滞を巻き起こすだけみたいな形になって。そこで、特色ある産業構造のところ結びついていけば大変いいのでしょうかね。高速道路あり、港があり、空港がありという形だと申し分ない、物流条件としては。

(辻委員)

利便性を打ち出して国際と関係ない、国内産業を誘致することができるということになりますね。

(中山委員)

今、皆さんおっしゃるとおりなのですけれども、新潟市は全国の中でどういう場所にあるのかということ、今、東京に近いというお話がありましたけれども、そういうことをはっきりして、それから日本海側に唯一の政令都市とどこかにありましたけれども、そういうことよりも本当に対岸から見て中心だという表現がまったくない。

それから、これは新潟県全体では確かに雪国だと思うのですけれども、少なくとも合併した14市町村ではほとんど雪がない。これは一つの利便性かもしれませんし、雪がないということがかかりする人もいるし、また、ないのを喜ぶ人も交流人口の中にあるわけです。ですから、そういうことを気象というか、地勢的なことをもう少し強調したらどうなのでしょう。それが、ほとんどここには書いていません。

それからもう一つ、いろいろなインフラ的なものが潮流の時にありましたけれども、それは今まで生かし切っていないわけです。その前に文章がちょっとありますけれども、この政令都市を機会に、これをどう生かしていくのかということをはっきり書いていった方がよろしいのではないかと思います。

(及川委員)

皆さんおっしゃったことで、五十嵐さんがおっしゃっていた環境という視点が非常にこれから重要な問題で、温暖化の問題もそうですけれども、酸性雨の問題もそうですけれども、その視点がもうちょっとどこかで詰められてもいいのではないかということ。

もう一つは、潮流なのか最初の方なのか分かりませんが、2014年問題という視点がもうちょっとどこかにきちっとしていいのではないかなと、あるいは13年末という話もありますし、これは北陸新幹線ができますと人の流れが随分変わってしまう。これは間もなくやってくるわけです。そうすると、その頃には新潟にはもう支店が営業所になり、営業所が分室になり、そういうことになってしまうのではないかと。お隣に神保さんがおられますけれども、JTBも新潟支店ではなくて、新潟分室になってしまったらえらいことになるなということで、どこかにあると思います。その辺を最初からとらえたものが必要ではないだろうかと思います。

それから、余計なことですがけれども、安心・安全という言葉を使っていますが、これは間違いで、安全があって安心がくるわけで、安全という手法なり方法があって、安心してそこに住めるという、生活できるという、あるいは精神的な安心というものがあるわけですから、言葉の使い方、順序は安全、安心という順序になると思います。それは余計なことです。

それからもう1点、今、辻委員から新潟地域経済のリポートがあるよと、それからもう一つ、まだ表には出ていませんけれども、ご覧になっていますか、新潟県の夢おこし政策プラン・マニフェストの具体的なものがほぼできたと思います。来週説明があるのですけれども、県は県だし、市は市だというのもいいですけども、その辺も横にらみしながらやったらいいのかなと思います。

(伊藤部会長)

2014年問題は、市町村もだいぶ意識としてはお持ちなのでしょうけれども、新幹線の本数が半分ぐらいになるわけではないかもしれませんが、影響調査みたいなものは既にどこかでなされているのですか、出ているのでしょうか、リサーチセンターとかどこかで。

(事務局)

新幹線の2014年問題については、我が市も非常に重要な危機感を感じていまして、上越新幹線活性化同盟会というものを新潟市が中心になって立ち上げました。その同盟会の中の研究事業の中で、若干の現状は昨年度調査いたしまして一定のものが出てございます。それを受けまして同盟会を中心に県も入っていますし、民間の皆様も入っておりますので、一体になってこれから具体の対策を講じてまいりたいと思っています。

ちなみに2014年問題につきましては、総論の方には少し記載がございましたが、本冊の113ページあるいは116ページのあたりに課題としてとらえて、具体のところは総合計画でございまして、こういう方向で取り組むという姿勢は各論の方で示させていただいております。

(及川委員)

だから、今、辻委員とどうやってそれを克服するかということをもっと前面にはっきりと出し

て、こういう施策をやるのだということは新潟市民に対するあれだし、どうなのでしょう、その辺は。

(伊藤部会長)

ありがとうございました。それから、中山委員の方からご指摘がございました新潟県の国際的な位置づけの認識について、18 ページに北東アジアから見た時の位置が書いてあるのですが、図は大きいのだけれども、文章をもうちょっと加えてもいいのかなと、それでどうなのかということで、こういう非常に有利な位置にあるので、もっと頑張っているいろいろな可能性を引き出せるというような、下にもうちょっと余白があるようなので、追加してもよろしいかもしれませんね。

(辻委員)

これに関しましてはお願いがあるのですけれども、往来した人の数でありますとか、あるいは貿易の統計でありますとか、そういう数字の裏付けがあればこれが生きてくる、ひょっとしてこうなっていないかもしれないわけでございますから、是非、お願いしたいと思います。

(中山委員)

日本地図を東京で見せて、新潟がどこにあるか をつけろと言うと、男鹿半島のあたりにつけます。だから、この辺の認識からまずおかしいのです。緯度的に仙台より北だと思っていますから。

(伊藤部会長)

私どもはここに住んでいるから、日本国民は新潟市はみんな認知してくださっていると思うのですけれども、とんでもないですね。

(中山委員)

みんな北にいてしまいます。

それと、20 ページの人を育てる環境づくりというところがありますが、この辺の表現、2 番目のところですが、これは内なる国際化をいっているのですね。国際性や協調性、他者を思いやるというのは・・・国際学的な用語としてあるのだから、使った方がいいと思います。国際化の問題というのは最後は環境問題まで入るわけですから、この辺で国際化ミニマムを少し考えた方がいいかと思います。

12 ページに基本構想で、五つの主要な観点の一つに教育とあるので、これももしこの五つの観点であった場合、20 ページの表現でも弱いような感じがするのですけれども、この辺、少し補足ないしは変えられたらいかがでございましょうか。

(伊藤部会長)

15 ページから項目についてご説明があって、「・」が三つぐらいずつだいたいついてきているパターンからすると、最後の 20 ページは二つしか「・」がないということも、もうちょっと

追加してもいいのではないかとご趣旨のご意見だと思います。

（事務局）

いくつか今ずっとご指摘いただいております。いろいろと検討しなければいけない部分が結構あると思いますので、盛り方とか、それから各論に落とすべきか、こっちに入れるべきかとか、いろいろ考えながら実はこれを作り上げてきておまして、総論はどちらかと言うと、特にピンポイントに絞り込まないで全体的な方向性を示していこうという部分でございますので、ちょっと舌足らずな部分が結構あるのだろうと、強弱についてもあまりここでは入れ込んでいなくて構成しているという部分がありまして、もうちょっと丁寧に説明すべき部分等いろいろあると思うのです。今ほど中山委員のご指摘の国際性というのを一つでポンとあげたりもしておりますので、多少付加した方がより言っている意味合いが分かるだろうという部分もあろうかと思っておりますので、その辺はいただいた意見をいろいろ検討させていただいて、次回こういう考え方にしましたというご報告を申し上げさせていただきたいと思っております。

また、中山委員から気象・地勢というご指摘をいただきました。これは特に今回つけていないのですが、本冊を最後にまとめ上げるときには必ずそういうのは入れる項目でございまして、歴史とか地勢は入れさせていただきます。今回ご指摘いただいておりますが、おきながらこんな言い訳をするわけですけれども、そういうのは入れさせていただくことにしております。ただ、その説明文に雪が少ないというのをどう折り込むかどうか、表で物語っていただくとか、そういった感じになるのか、ちょっとその辺も工夫しながらやらせていただきたいと思いますところがございます。

あと、今議論が生まれて、一番難しいのが位置づけ論だろうと思っております。これは道州制もろしかり、それから国土形成計画法もそこで区割りも出てきましたが、それろしかり、そして新潟がそもそもどう持つのだということ、これをどうやるかという部分があろうかと思っております。そういった面での3番目の都市像というのは、言ってみればそういうものをもっと出して分かるようにしていかなければいけない部分なのかもしれません。都市像として見せる形で世界とともにという辻委員の世界のアムブレラの中にあるという言い方をされましたが、都市像としてこういう打ち出し方をしていますが、私どもは決して世界だけに目に向けているのではなくて、今までご指摘いただいた国内という、特に交通基盤というのは先行政令市、それからこれから一緒に政令市になろうとしている浜松、こういったものと比較しても交通基盤は本当に恵まれている、生かし切れていないですが、恵まれている。高速道路が4方向に向かっているということは、17政令市の中では一番でございますので、そういったような状況を十分踏まえながら方向性を組み立てているのですが、恐らく舌足らずなり、あるいは方向性をもう一つ出していった方がいいのか、そんなような工夫とか、どういう盛り込み方をするのか、また検討させていただきたいと思っております。確かに位置づけというのは大変重要な部分になりますので、ご意見は本当にどん

どんいただければと思っています。よろしくお願いします。

(伊藤部会長)

ありがとうございました。皆さんからちょうだいしたのに対して、今、石井部長の方からお話がありましたように、本編に盛り込んでいるところもございますので、そういったものを踏まえて表記の仕方等についても検討させていただいて、次回お示ししたいということでございますので、よろしいでしょうか。ありがとうございました。

それでは、これで終わりということではございませんが、先に進ませていただいて、また次回もう一回、全体を見直していただくことにしたいと思いますが、あと1時間くらい、今度は基本計画についてのご意見をいただければと思います。23ページから40ページまでの内容でございます。これも同じようにこれからご意見をちょうだいいたしたいと思いますが、先ほど追加でご説明いただいた人口の問題も含まれておりますので、どうぞよろしくお願いします。

(中出委員)

前回、事務局の方に資料を用意しておいてほしいと申し上げて、今日用意していただいてありがたかったのですが、いくつか疑問は解けたのですが、平成17年の数字は速報値とはいえども、その数値を推計値で使っているということでもいいわけですね、17年は正しい数字なのですね。

(事務局)

そうです。

(中出委員)

そうすると、12年で推計した時の17年値と比べると、下方修正だったのか上方修正だったのか、どちらだったのかをまず教えていただけますか。

(事務局)

下方修正です。

(中出委員)

基本的にはそういうことで、既にそういうことになっているのだという事実がまずあるのだということを知っておかないといけないと思います。

それから、追加資料の1ページ目のところにある社会保障人口問題研究所の全国中位置というのは、実はものすごい楽観的な数値であるということが知られているわけです。楽観的な数値だけれども、国は基本的にはこれを使いたいと言っているのです、それを使っているのはそれほど問題はないのですが、問題なのは4万人をどこで確保しているのかといった時に、僕は合計特殊出生率を言っているのだとすると、これは結構大変なことだろうなと思ったのですが、それはまったくいじっていないわけですね。

(事務局)

1 ページ目の合計特殊出生率はベースのやつで、これをそのまま少し上乘せして、赤いラインもこれを使っています。

(中出委員)

楽観なものとしているので、実際には県よりも低い中で、本来ならば県と同じような推移をすると若干高めなのだけでも、0.0 いくつを増やすことがどれだけ大変かということなのです。今の状況で言うと、下手すると、ものすごい勢いで減っていくのではないかとということで、それは本論の中にも子どもを育てやすい環境を作ると書いてあるのですが、それが政策的努力で、合計特殊出生率はここまでにするということをちゃんと明記しておいていただければ、それは問題ないと思うのですが、これをちゃんと書いておかないと、最初の数値すらおかしくなるのではないかとということ。

それから、雇用の場の創出に関しては、これは若年層の転出を阻止するというのは間違っていないと思うのですけれども、この若年層というのはそもそも 18 歳の時点で出ているので、その人たちが大学を卒業して戻ってくるのに、ふさわしい職場がないというのはよく言われることです。それを都市型産業で引き受けられるかというところのストーリーをもうちょっと考えておかないと、今、新潟市で毎年 18 歳人口がどのくらいいて、どのくらい県外に出て行っておられるか分からないですけれども、出ていったまま戻ってこない人と、毎年 2,000 人は増加させるというのは、その人たちに戻ってきてほしいとっていることだと思いますので、その部分が確保できるかというのは。何を申し上げたいかと言うと、18 歳で出て行った人は多分結婚しないで戻ってくる、22 で戻ってきて就職してもらうことが多分普通には考えられると思うので、一人で戻ってくると思うのです。一度向こうで就職するとなかなか戻ってきてくれないと思うので、向こうでカミさんを見つけて戻って来てくれれば確かにいいのですけれども、その辺のところはもう少しリアリティーのある数字にしておかなければいけないのではないかとということです。

それから、新潟は周辺から収奪して増えるという、それはそれでもいいのですけれども、今は既に逆に新潟がストロー効果で奪われているわけです。そのところをどうするかという時の考え方が、都市型産業を作っても新潟以外のところに出て行かれてはしょうがないので、ここに書いてあるものを都市型産業だとするとこれでいいのかもしれませんけれども、少なくとも失業者対策とした時に、失業者に再教育が相当必要な産業だと思われるので、数字をいじるのも、そのところがどこかで施策として書いてあれば問題ないと思うのです。

ただ、これから申し上げるのが一番問題なことなのですが、人口の対応策というのは、ほとんど旧新潟市に適応できる施策であって、旧周辺市町村にはなかなか適応しにくい施策であると思うのです。そうした時に、それぞれの旧市町村別に国立社会保障人口問題研究所の小地域の推計で、当然各市町村ごとに出せるわけです。そうすると、元々どういう推計になったのかということ

ころが結構ネックになってきて、中之口とか月潟とか、あるいは巻町ですら相当減っているような推計がもし出ているのだとすると、その部分も含めて全部が上乘せできるようになかなかなくて、旧新潟市用の施策しかなくて、82万人の人口が今よりもますます中心に固まってしまうような施策しか打てないのであればまずいと思うので、今ここに書いてある施策として、旧周辺市町村にいきそうな施策というのは、3ページ目の一番下に書いてある団塊の世代のUJイターン、これは100人でそれを13の市町村に振り分けると非常に少ないですよ。もうちょっと旧新潟市ではないところに対する施策というのが本来ないと、中心だけ栄えて周辺が寂れるというのが、新潟市の外側が寂れるのではなくて、新潟市の中の新潟市の外縁部が寂れるということになってしまうような気がするので、もしも可能であるならば小地域、つまり旧市町村ごとの推計値を出して、それに対してどういうふうにするつもりなのだというものをご検討いただいた方が、もうちょっとリアリティーが出ると思うのです。かなりしんどいことになるのかもしれないと思います。

というのは、長岡でやりますと、長岡市全体はそれほど減らないのですが、山古志村は20年後に2,200人いたのが800人になるということになっているのです。800人はまずいので、1,200~1,300までは残したいとすると、400人どうやって確保するのかということで、山古志に対する政策を打つわけです。それをしないと無理だろうと思っているわけです。私は新潟市のことをあまり存じ上げないのでこれ以上は言いにくいのですけれども、小須戸であるとか、わりと小さな市町村があります。そういうところの人口の今後の行く末を考えた上で、こういうトータルな人口の積み上げにいただいた方が、リアリティーがあるかと思うのです。

ここで、目標人口頑張って82万をピークにするというのを問題にしているのではなくて、この数字の根拠を説得力ある形で示せばいいのです。場合によっては旧新潟市はもう増えない、周辺に増やすのだというぐらいにしないと、周辺に絶対に人は行かないのです。だから、産業も人口も周辺に配分するというふうに、旧新潟市は覚悟を決めるぐらいにしないと増えないと思うのです。そこが難しいところなのですけれども、すみません、勝手なことを申し上げて。

(伊藤部会長)

今、最後の方でおっしゃったように、確かに新潟市の人口は空洞化して、周辺部の横越だとか西川が増えているのです。

(中出委員)

そうは言っても、新潟市の周辺も増えていますよね。それよりも外側に広がらないとまずいのではないかなと。

(伊藤部会長)

それでは、事務局、どうぞ。

(事務局)

今の質問の最後のところでございますけれども、それに対して二つちょっとお話をさせていただこうと思うのですが、一つは雇用の場を創出して、都市型産業で上乗せをしているわけです。その雇用の場は旧新潟市がある程度は集中すると思いますけれども、ただ、そうは言うけれども、一方では交流人口を増加させて、そこに付随する産業を育てるとというのが一つねらいにあるわけですが、そこで、新潟市全体を見渡した時にその魅力、交流人口、例えば観光客という視点で見た時に、旧新潟市にも魅力がいっぱいあるので当然、旧新潟に集中はしますけれども、例えば周辺部の観光資源もありますし、宝もあるわけです。横越には北方文化博物館もあり、新津には里山があったり美術館があったり、鉄道の町みたいなものもありますし、必ずしも都市型産業が全部旧新潟市に、20,000人の雇用増があるのだけれども、20,000人全部旧新潟市ではないと思います。旧新潟市に集中するのは否めませんけれども。

もう一つは、現在でも通勤の形態が新津とか豊栄とか白根とかを見た時に、現時点でかなりの比率で旧新潟市に就業しているというベースの構造がありますから、新潟に雇用が発生したからといって、全部旧新潟市にお住まいにはならない。これだけ交通機関も発達していますし、白根には白根のよさもあり、新津には新津のよさもあるので、そこはコンパクトなまちづくりに連動してくるのですけれども、この市街地の構造はあまり変えないで、旧新潟市の市街地だってそう多くは拡大しないと、今ある市街地を大切に、そこにお住まいになって、当然通勤は旧新潟の方に大きな流れが発生すると思うのですけれども、そんなことは少し考えていたところがございます。ただ、だからと言って全部旧のところそのまま住み続けるかというところではなくて、先生がおっしゃるように、旧市町村単位でも1回シミュレートしたのです。そうすると、遠いところになると、かなり下がってくるのです。今のやり方は、今度全新潟市でコーホート法を用いてやって、旧市町村別に参考としてちょっと見てみなければいけないので、それは旧市町村別で単独にやった時の比率を全体で回した時に当てはめて、旧市町村ごとにチェックするために出したりもしているのですけれども、やはり落ちるところは落ちていくという現象が見受けられるところなのです。そんなふうに私どもは考えて推計したところなのです。

(辻委員)

今出てこなくて、人口の場合、新潟は大学のようなもの、各種学校とか専門学校とかたくさんありますが、そういう教育の場として若い人を引きつけてくるとか、そういう観点はどこかに入れられたらいいのではないかと思ったのです。ちょうど大学の先生もいらっしゃいますし。

(伊藤部会長)

36ページのところで、街の形のイメージが書いてございますが、今議論になっていますように都心と郊外の関係というところですが、暮らしやすさというところからすると、都心の方は都心



としていいとしても、本来は郊外の地域を抱えているということで巻とか白根とか、郊外とのネットワークをどういうふうにつないでいくかと、便利な暮らしやすさにしていくかというところも大きな市としての課題なのだろうと思いますが、ここで言うと、黄色い連携軸というのがもっと生き生きと活力を持つと、住まいとか何かも地価の高いところよりも、もう少し安いところとか、あるいは環境のいい田園のところに暮らしてということにも気が向いてくるのだろうと思いますが、こういうところのつながりをどうやって強めていくかというのが課題なのだろうと思います。

(中出委員)

私が申し上げたかったのは、今伊藤先生が言われた 36 ページの絵で言うと、今まで全国ほとんどそうなのですが、中心という定義が難しいですけれども、郊外部と農村部というふうに考えた時に、ここ 20 年もしくは 70 年代から考えると 30 年近くの間、中心の人口が減り郊外が増え、なおかつ農村が減るといって三重構造をどこの都市も経験していて、なおかつ施策も郊外の開発は一生懸命やっていて、中心部にあまりお金を落とさず、郊外・農村部についても、農業の環境整備はしていますけれども、農村集落に人が住むような施策はあまり打ってこなかったのです。やはり 21 世紀型になって、特に新潟市の場合には田園都市という宣言をしているからには、なおかつコンパクトな都市というからには、郊外はどちらかと言うと人口はそれほど増えないから、郊外に関して手当をするよりは中心部に人を住ませ、そして農村部に人を住ませるということが大事になっていくと思うのです。メリハリを今までは農村に対して郊外を中心にしていたのに、今度は逆に中心と農村部に重点をおいて、郊外は今までの趨勢でいってもらおうというぐらいにしないといけないのではないかと。そういう中では、僕のイメージでは西川とか白根とか、あるいは横越とか亀田とかいうのは新潟の郊外ですよね。そういうところに関しては放っておいても伸びてしまうかもしれないけれども、もっと外側が大変なのではないかという意味で、野放図な拡大をさせないで、コンパクトにしながらより外側の農村集落を抱えているような中心部と農村集落をどう維持していくかという、そういう結構難しい課題を新潟市は抱えているのだろうと思ったのですが、その時に人口がどういうふうに 20 年後に分布しているのかということで、人が住んでいないといろいろな活動もできないものですから、そういう意味で各地区ごとの人口の推計もしておいていただきたいということです。

(伊藤部会長)

今井さんもおられますけれども、亀田郷という地域がございますけれども、亀田郷の中でも過疎地域があるのだと、例えば阿賀野川周辺部に並んでいるような集落とかというのが。それで、そういうところは危機感を持っているから、どんどん工業団地とか住宅団地をうちの方に誘致してくれというふうにして、農地はどんどん提供するからというようなことで競って陳情され

たり、あるいは道路などもどんどん提供してきたというのがある。亀田郷はあんなに便利なのに過疎地域がある。人口がどんどん減っているのでしょうか。そんな話がございました。今井さんはそんな話を聞いたことはありませんか。

(今井委員)

私は4区の住民ですから、当然、旧新潟市のエリアも一緒になっているものですから、その地域の方が逆に両川とか...、曾野木は団地がありますからそれなりに増えているでしょうけれども、両川とか大江山の方の純農村地帯は後継者不足で減っているということはよく言われていました。そんなことで、団地造成なりをしてほしいというような陳情もあったのですけれども、現実には農振の網がかかっているから無理だと。

この人口の問題で、全体はこれでいいのでしょうかけれども、旧市町村単位、これもそうなのですけれども、これから分権型の政令市になると、8区で特色あるまちづくりをするという位置づけになる。そうすると、この人口が8区のエリアでどういう配布になっていって、それを元にして特色あるまちづくりをしていくのかということが、ここは全体は分かるのですけれども、区のビジョン立てをしている時にその辺をどう生かしていくのか、区単位でのそういう方向性を出しておけばいいかなという感じもいたします。

(伊藤部会長)

中出先生のご趣旨もそういうことだろうと思うのです。

(中出委員)

旧市町村は分かれられないのです。新潟市だけが分かれるのです。だから、旧市町村を積み上げれば区の元にはなると思うので、まさにそういうことですよね。

(伊藤部会長)

ありがとうございました。それでは、まだご発言ございません委員の皆さん方を優先的にお願いできればと思いますが、今井さん、突然振って申し訳ございませんが、その他にございませんか、お気づきのところ。今井さん、ありませんか。それでは高橋さん、お気づきのところ、ご意見でも結構ですが、お願いします。

(高橋綾子委員)

基本的にここに書かれているのは大変よく分かるのですが、先ほど中出委員がおっしゃられたとおりだと思うのですが、旧新潟市内ではなくて奥ということで、旧市街だと放っておいても行くだろうとおっしゃられたのですが、中心は空洞化してきているし、旧新潟市内の郊外、いわゆる西地区が成熟した街になって、高齢化率が高くなっている。いわゆる団塊の世代が住宅を造って引っ越してきて、4人家族だったのが独立して、年寄りだけになっていくというのが坂井輪地区界限だろうと思われるのです。合併してそれ以外の旧新潟市以外のところは、坂井輪地区と近

い地域もあるけれども、広いですから農村区域というのもありますから、このところに農村といえますか、花と緑を生かすというふうに出ている以上、新津・小須戸で言いますと、花の産業を抱えているわけですが、花の産業も農業とまったく同じで、後継者不足になりつつある、そして、それで暮らしていけない。先ほど五十嵐委員がおっしゃられたように、収入があって、税金がかなり取られてとすると、本当にそれだけでは食っていけない。食っていなければ、親の職業である花づくりをそのまま後を継いでいくというのがなければ、当然人は減る。そして、新津・小須戸5区の高齢化率が26%くらいで、合併した中では飛び出ているのですけれども、その理由も考えるに、よそから持ってくるということももちろん大事なのですが、今いる人を逃がさないということを考えていかなければいけない。そうでないと、これからコミュニティを大切にということでコミュニティづくりをやっているにもかかわらず、動ける人がいなくなってしまうわけですから、代々昔のようにというわけにはいかないですが、家長制度で親の後を継いで長男がいて、またその子どもがいてというふうになれば一番いいですが、そうはならないので、であれば、今あるのをどう生かすか、そして住みやすくして若者を定着させることを考えるかということが、この辺のところの前面にももう少し具体的な言葉として出てきたらいいなと、都市型産業従事者というだけではなく、出てきてもらうといいかなと。そうすると、その後の区ビジョンとか区のことが、それぞれ区に合ったのでまた考えて見つめ直していけるし、進めていけるのではないかなと思っております。

(伊藤部会長)

ありがとうございました。今、ご指摘のございましたように、西地区の方で言うと、かつての小針は団地があって、若い子どもたちもいっぱい住んでいたと、それがだんだん5年、10年していくと、もっと西の方へ行って寺尾とか、私の五十嵐のあたりも賑やかになって、若い人たちが家を造ったりして、お祭りなんかで非常に賑やかになっていたのですが、だんだんそれがもっと西の方に行ったりすると、振り返ってみると小針のあたりは高齢者の方が住む団地になって、それもだんだん空洞化が目立ってきているのですが、私どものところのお祭りなども、かつては子どもがいっぱいいただけけれども、最近は本当に数人ぐらいしかいないです。だから、御輿を担ぐのも嫌がって、リヤカーに乗せながらやっと担いでいる。それで、小針あたりを見ると、あの造った団地というのは、後を継がないでせがれさんが出ていたりするとどうなっているのですか、売っているのですか、だいたい。

(高橋綾子委員)

45、6年くらいは浦山あたりまでしかなかったが、それからどんどん西へいったわけですが、その頃、住宅にどんどん越してきて、赤塚とかは農業とかやっていますけれども、少ししかないですね。次の世代、団塊の世代の子どもたちは都会へ出ています。都会へ行っていて、

70代後半から80代前半くらいまでだと、だいたい皆さん介護保険を少し使いながら取りあえず暮らしていらっしゃるのです。ところが、連れ合いをなくされたとかで一人になった、そして介護だけでは心許ないとすると、その方たちはまず空き家になってしまうのです。すぐは売れないのです。やっぱり値段と折り合わないのでしょうけれども、空き家になって、その後、その方たちは施設に入ったりとかされて、やがては親族の方が売っていますから、次また更地になって売りに出されるという感じなのです。

(伊藤部会長)

申し上げたかったのは、人口の動態とかも塊で見えていくというのもあれなのでしょうが、今の生活パターンみたいな形で追いかけてみると、新潟市の特徴みたいなものが浮かび上がってきたりするのかなと。そういう意味では、東京に出ている人が就職先をふるさとの方に見つけてくれるような定着なり、Uターン率をもっと高めていくまちづくりということも必要ですね。全国的に見ると、金沢あたりは学生が戻ってくる率が非常に高い街だと聞いたことがありますけれども、何が引きつけているのかなと思うと、新潟市の足りないところはどこなのだろうかと、若い人たちに魅力をもってもらおうのが大事ですね。もっと中山間地の方に行くと、戻ってきたいけれども、働く場所がないとおっしゃるのです。農協とか役場くらいが最大の企業ということになるのでしょうかけれども、中小企業、従業員が2人、3人くらいのところがあっても、若者には魅力がないのです。もうちょっと新しい形のものが、下請けの下請けをやっていると子どもたちは魅力がないし、親も、何もこんなところに来なくてもというようなところがあるようです。繰り返しになるようですが、そういう意味では生活のパターンを追いかけてながら、若い人たちに戻ってもらおうようなまちづくりも非常に大事なのかなと思いました。

(辻委員)

これに関連して、先日、ある県のデータを見ていたのですけれども、新潟というところは全国的に見てもJターン、Iターンが非常に多いのだそうです。ところが、新潟以外の土地の人がここへ移ってくる率が全国的には最低レベル、外の人が入って来にくいという、あるいは来るだけのインセンティブがないところだという統計を見たのですけれども、別に新潟の人に帰ってもらっただけでなしに、全国から新潟は住みやすそうだからあそこへ行きましょうとか、新潟に魅力的な企業立地があるから働こうとか、そこまでダイナミックに考える必要があるのではないかと思います。

(伊藤部会長)

神保委員、何かお気づきのところはございませんでしょうか。

(神保委員)

一つ教育のところなのですけれども、今ほどどうUターンさせるかということがありましたけ

れども、高校を卒業した時に、県外に出てしまった若者はなかなか戻ってこない。その部分から食い止めていく、県外に出ないような、それは教育の問題だと思うのですけれども、例えば専門学校も数多くできてきているのですけれども、新潟県内で若い人たちの教育の場を提供していくか。

それから、国際化できるような環境の教育づくりみたいなことを推進していくことによって、新潟が教育の魅力を増していくことによって、根っこのところから食い止めていかないと、いったん出て行ったらなかなか戻ってこないというのが実態なのではないかと思うのです。そういう意味では、教育の問題というのは重要なのではないかと思います。

(伊藤部会長)

ありがとうございました。今度、こちらの高橋忠行委員、何かお気づきのところはございませんでしょうか。

(高橋忠行委員)

総論としては記入されているとおりだと思うのですが、これからは総論を要約すればある程度になると思いますが、あとは各論という形になるかと思しますので、各論の中で総論を補完していくというような形になるのではないかと思います。各論の時にまたいろいろ意見を申し上げたいと思います。

(伊藤部会長)

ご遠慮なさらずにもう一回、次回にこの部分をやることになっておりますので、次回までにご意見でもご要望でも結構でございますが。池主委員はいかがでございましょうか。

(池主委員)

私も先ほど辻委員がおっしゃっていたように、産業経済という部分でのアピールというか、覚悟というようなものが現在の都市像に見えてこないという印象を受けました。都市像というのは、やはり新潟市民としての自覚ということでも非常に重要なのですけれども、先ほど中山委員がおっしゃっていたように、私たちはこういう都市に住む市民ですというようなアピールですとか、新潟市はこうですということを対外的にアピールするためにも非常に重要な部分だと思いますので、そこがぼやけてしまうと非常に残念だと言いますか、効果が薄いように思うのです。男鹿半島のあたりを新潟市として指してしまうというような他県の方というのは、新潟のことを北で非常に寒い場所、しかも最近はかわいそうな街、かわいそうな県というイメージを持たれていまして、例えば新潟県と考えた場合に、私は実際に言われたことがあるのですが、新潟市が県庁所在地というのは一応知られているのですけれども、長岡の方が大きい都市なのでしょうと言われたことがあるのです。そういうようなイメージ、東京に近いから長岡の方が大きい。その人は長岡に行ったことがある人なのです。長岡よりも新潟市は田舎だと思っている。そ

うというようなイメージを持たれてしまっていますが、実状ではないわけですから、これを機会にそうではなくて国際的な交流もあり、地勢的にもこうこうですという記述がなくて、こういう活動もできるというようなことをアピールする都市像というものを、もうちょっと鋭くアピールできるような基本構想であった方がいいのではないかなという感想を持ちました。

(伊藤部会長)

女性にとって魅力のある街というのは非常に大事ですよ、女性から嫌われたら全部だめですね。男の学生を見ていても、本当に元気のいいのが女子学生でありまして、女性から嫌われたらこの世の終わりという感じになるくらい非常に悲観的なことなのですが、それだけ元気な女子学生が多いのは頼もしいことなのですけれども、女性から見ての新潟の街、暮らしやすさも私も男性と違った目もお持ちなのかと思います。池主さんはマーケティングを随分おやりですが、新潟市に欠けているのとか、あるいは良さというのはございませんか。

(池主委員)

いろいろな視点があると思うのですけれども、住むということで考えた場合、元々住んでいる人間は知っているのでもいいのですけれども、例えばご主人が新潟に転勤になるといった時に、奥さんは非常に嫌がるということ結構聞くのです。それはなぜ嫌がるかと言うと、寒そうだから、雪が降るから嫌だと。

(伊藤部会長)

東京あたりから転勤する時ですね。

(池主委員)

そういうイメージが非常に強い。非常に寒い大変な場所だと思って来ていると、一層そういうふうを感じるというのがあるみたいで、実際よりも非常につらく感じるというところがあると思うのです。そうではないよという、住みやすい場所だと思うのですけれども、そういうふうなアピールが欠けているのかなというところと、あと、観光で見た場合に、行ってみたい場所というのはどういうところだろう、女性が旅行したい場所はどういうところだと思うと、神戸であったりとか、横浜であったりとか、ちょっとおしゃれなイメージがあるところだと思うのです。そういう意味で、せっかく新潟は五開港の一つであって、ムードのある場所もあるとは思いますが、そういう部分がうまくアピールできていないし、実際にあまり街として生かしていないのかなと、そういう意識が最近、まちづくりで高まっているとは思いますが、そこはもうちょっとうまくできないと、新潟は雪が降ってお米がおいしくて、お酒がおいしい、お魚が捕れるというだけでは全然引力が弱いと思います。

(伊藤部会長)

ありがとうございました。神保さんは、それこそ新潟へ転勤でおいでになったわけですから

も、前も新潟に一度働いておられたことがあるそうですけれども、離れてみて今のようなインパクトはあまりお感じになっていませんでしたか、男鹿半島あたりの……。

(神保委員)

私どもの会社の関西の人間と話をする、新潟は東北のイメージしかないのです。位置というのははっきり分らない、東北のどこかにあるというイメージをまず持っている。そういう意味では、場所も分らないというような中途半端な存在だと感じます。

それから、正直に申し上げて魅力というのは何だろうと、住んで分かるのです。住んでこそ分かる魅力がもちろんあるのですけれども、一般的に何が魅力なのだろうかといった時に、すぐ出てこないのです。その魅力は非常に薄いのだろうなという気がします。

全然話が変わってしまいますけれども、新潟の冬が長い、天気がどんよりする季節というのは、どうしても太平洋側と比べて長いわけですけれども、逆に私はそれをいい要素の一つに利用できる。ヨーロッパはそういう天候の中で芸術だってできたわけです。新潟というのは産業のことももちろんそうですけれども、芸術を積極的に育てていく、それが集客につながる。東京にはないけれども、新潟ではこんなものが見えるというのをどんどん積極的にして呼び込んで、芸術・文化を育てていくということを積極的にやっていくことによって、街の魅力というのが非常に多く出てくるのではないかという気がします。そういう冬のどんよりとした季節、だからこそ芸術を育てる、そういう環境づくりというのが大事だという気がします。

(伊藤部会長)

ないものねだりをするよりも、あるものをもっと生かしていくという発想ですかね。

(辻委員)

あるいはイベントとして作ればいいわけです。何とかの音楽祭というような形で。

(伊藤部会長)

地吹雪ツアーとかをやっているところもありますけれども。今度は長井委員、いかがでしょうか。田園都市で食を担当しておられる長井さんでございますが。

(長井委員)

これは決して新潟だけでなくして、一つの流れだと思うのですけれども、農業に触れてみたいとか、気持ちにゆとりがほしいとか、ゆったりした生活をしてみたいとか、かなり農村の中に都市の皆さんが入り込むようになりました。例えば私の仲間であります大江山地区に住んでおられる方が農場を開放して、そしてまた農家レストランという形で、常に今まであった生活から進化してきているというのがあるわけですし、あるいはまた宿泊施設で都会の学生たち、あるいは小さな小学生が体験型の修学旅行という形でどんどん利用するような形で、ところが受け手が少なすぎて、観光業界は民泊の宿探してんやわんやで、なかなか思うにまかせないと、そのくらい二

ーズはあるということなので、それはロケーションというか、すてきな場所を求めて観光客とか、あるいは修学旅行が場所を選定するかと言うと、決してそうではないらしい。だとすれば、新潟だって平地の農村であっても、受け皿づくりさえして特徴を出せば、十分いけるのかなとか、そんなことも最近考えさせられています。

先般も横浜の32歳と34歳のご夫婦でしたけれども、我が家へ農業をちょっと覗きに來ましたということで、寝泊まりをして研修をして行きました。これが新規就農で、全く農業に関係のないところに住んでいた都市生活者ですので、彼らがチャレンジして新規就農できるかどうかというのは相当難儀な作業だとは思うのですけれども、そんな人たちも新潟県が、例えば首都圏で農業の就職斡旋をしますよ、農業のお手伝いを試みませんかとか様々な提案をすると、何百人という都会の若者から団塊の世代まで、かなりの数の皆さんが寄られるそうです。実際、新潟に足を運んで農業体験をしてみたいということで來られるのも年間相当な数に上がりますし、今回私のところに泊まった人たちだけでも15～6名、県内の指導農業士の皆さんのところに分配して宿泊をお願いしているわけですけれども、何かおもしろい時代になりそうだなと思っています。

この部分については、最初の方の様々な入り口の部分は事務局から説明がありましたように、あまり細かくうたい込まないでざっぱにしておいて、いかようにも解釈できるというか、自由度を増しておいた方が、むしろ後からその時その時に具体的なプランの中で組み込んでいって、イメージがすぐ伝わるような形にして、そして変化があった時に、即座に見直しができるという形の方が仕事としては一番やりやすいとは思っています。

(事務局)

今、長井委員の方から、私どもが言いたかったようなことにちょっと触れていただきました。まさに総論の部分というのは、そういった役割が非常に多い部分になります。

今ほどのいくつかの発言を聞かせていただきまして、もっともなことで、かつ耳の痛いことである、まさにそういう認識を持っています。特に今回のこの総合計画の作り方、1回目の審議会の時にも若干触れさせていただきましたけれども、見せ方のポイント二つという形で説明をしたつもりなのですが、一つは区になる、先ほど分権型という言い方もしていただきましたけれども、区になるというステージ、そこをどうこの総合計画で折り込み、かつ分権型を区ごとでどのようにやるかというものが一つあります。

もう一つは、重点プランという形で出していないと、メリハリのないものになってくるということがあります。その重点プランの見せ方ということが非常に大事になってくるのだらうと思ひまして、その重点プランの見せ方の部分に今ほどの発言がほとんど凝縮されるような形になるのかなと思っています。特に私ども最も反省しなければいけないのは、せつかくいい宝物、魅力を持ちつつ何も発信してこなかった、これは我々のある意味エスケープだったかもしれません。



しかし、そういったことはご指摘のとおり、私どもも本当にそのとおりだと思っていて、シティプロモーションという形でもう既に始めていますが、重点プランの中にも入れていきたい。是非新潟のイメージを払拭したいということで考えております。発信下手、PR下手というものが今まであったわけですが、そういったものからチャンネルを切り替えて、シティプロモーションという形で、どうぞ住んでください、どうぞ来てください、交流してください、それをまず大きな柱にしたいと、していくべきだという形でのつもりでございますので、その辺は重点プランの中に書き込んでいければと思っております。

また、ここでの一つの問題点として表現力というものがあろうかと思っておりますので、その辺のところについてはいろいろと考えていかなければいけない部分になるかと思えます。言葉の意味とか、あるいは使い方、別な表現、あるいは付加したというようなところは、今日のご意見を聞きながら改めていく形にしていきたいと思っております。

それから、先ほど高橋委員がちょっとおっしゃったように、小針のことをおっしゃっていたので、私も及川先生もそうなのですが、いわゆる昔の小針十字路の方に住んでおりますので、生活体験からちょっと申し上げさせていただきますと、高橋委員がおっしゃったような変動が出てきています。ただ、これが昨今どうなっているかと言いますと、そこを開拓した世代は徐々に要介護になり、他界している。私の両親もそうでございます。私がそこに住んでいるという格好です。また世代交代しているところも見えてきている、あるいは先ほど高橋委員がおっしゃったように、空き地になって見受けられたと。しかし、そこに今度は若いご家族が新しい建物を造って住んでくるという土地の様変わりには、小針の方では起こりつつあるかなという状況になってきております。

(事務局)

それに加えて、私も普段思っていることなのですが、団塊の世代たちが住み始めた古い住宅地も大きく分けると二つありまして、ちょっと専門的なことにはなりますが、都市計画法が施行されてから6メートル道路の区画整理になっているのです。要するに車に対応したまちづくりが進められたのが昭和44年に都市計画法が施行されて、45年に新潟市は線引きを行ったのですが、それ以降の開発というのは比較的良好な都市基盤を有した開発なのです。それ以前の4メートル道路の継ぎ足し継ぎ足しの青山浦山町、実は私の実家はそこにあるのですけれども、空き家になっています。そういうところはなかなか売れない、若い世代も来ないのです。というのは、4メートルのクランク状でようやく到達できるようなところに50坪程度の区割りですけれども、私のお父さんも住んでいたのですが、そういったところをどういうふうに持続性を高めていくかというのは都市計画の問題ですけれども、ちょっと細かい話ですが、土地利用と関連しますのでお話ししたかったのですが、そういうコンパクトなまちづくりを標榜しているのですけれども、今度各論

になってくると思うのですけれども、あるいは都市計画のマスタープランの問題になりますが、そういったところも一概に古い市街地も一律にとらえられなくて、6メートル道路の新しい開発のところと、それ以前の非常に狭隘な道路のところ、新潟市島部の一部もそういうところが見受けられますが、その辺の住み方を真剣に考えていかなければ、本当の意味のコンパクトシティは実現しないと思っています。これは各論の方でまた議論されるべきところだと思います。

(伊藤部会長)

行ったり来たりしながらやっていかなければならないと思いますので、だから総論というのは割と解釈が自由にできるような軟らかさを持った内容でいいのではなかろうかと、とどめを今日の結論みたいところになるようなあれですが、それにしても基本的な考え方、全体にかかわる考え方でございますので、遠慮なさらずにお出しいただきたいと思っています。

(及川委員)

来週でもいいのですけれども、一つは産業というか、市の税収がどんどん落ち込んできて、これをどうするのかという、税収を上げるための方策も各論で出てくるとは思いますけれども、もうちょっと大きな柱としてどこか隅に置いて考える必要があるだろうと思うのです。今ここに長井委員がおられて、私が農業のことを言うと大変失礼なのですけれども、例えば農家も青色申告させるというような指導をして税収を上げていくと、農家を本業にしていくというような、若い人もそっちに入っていけるような。今、農業をやって100万から200万の収入では、若い人は農業に行きません。だから、税収を上げていく産業、それが一つだろうと思うのです。税収を上げるにはどうするかということを考えないといけない。

もう1点は高齢化、いかにして高齢者を使って金をはき出させるかという、その施策をどこかに考えていく必要があるのではなかろうかなと。要するに高齢者を80まで使うと。例えば農業、圃場整備ができてみんなパソコンで、水の管理もコンピュータで、最近の農業機械というのは全部コンピュータですから、高齢者にはできないわけです。

(長井委員)

それでも、例えば旧新津ですと、シルバー人材センターに登録されている皆さんが一番仕事に就きやすい場所というのは花の産業です。どんどんシルバー人材センターからの利用度が上がってきているのです。こういう使い方をやるとね。

(及川委員)

だから、市全体でね、今おっしゃったのはまったくそうなのです。だから、コンピュータが使えなくても、そういう人にどんどん仕事をやって金儲けしてくれるところをやれば、市の税収も上がるし、農業も活発になるしと、そういうことを政策の中で、これは伊藤先生がおられるところで余計なことを言うと怒られますけれども、いかに税収をあげる、それから高齢化、高齢化、

困った，困ったと言わないで，その人たちを気持ちよく使ってお金をはき出させるかと，別にうたわなくていいですが，そういう精神をどこかにもってこれを作っていたらいいなと思います。

（中山委員）

話は違うけれども，ちょっと教えてください。23 ページです。実施計画で見直しをやるとさっきお話がありました。それで，3 と 5 に分けた理由が分からないのですが。

（事務局）

合併建設計画，全体を平成 26 年までに計画期間を定めたのは，そもそも合併建設計画の最終年度に合わせたものです。この実施計画を見ましても，合併建設計画の実施計画というものがございまして，前期・後期と分けております。その前期・後期のちょうど分かれるところに 21 年でございまして，合併建設計画の終了に合わせて，ということです。

（伊藤部会長）

よろしゅうございますか。先ほど小針，西地区の人口の動き等の話をお聞きしていて一つ思い出したのは，外国の話なのですけれども，イギリスでは若いときはお金がそんなにないので，都会のアパート暮らしからスタートしていくと。あっちのアパートも窓の大きさというのが1階と2階と3階と4階で全然違うのです。道路よりも低いところにも住まいがあったりして，窓が本当に狭い，だんだん広がっていくようすだけれども。若いときはそうで，だんだん金がたまって結婚して子どもができたりすると，郊外で家を借りて住むと，ついのすみかというか，一番の目標は庭付きの家を持てるという，郊外で暮らすというのが一番の私どもイギリス市民の願いですというのを聞いたことがあったのですが，向こうはカントリーサイド，田園というのでしょうか，非常に大事にするということのようです。

それで，今まで私どもは例えば一つの団地を造るにしても，全部デベロッパーの方々が先行取得されて，区割りをきちっとして売り出し開始という形でそこに入ってきたのではなからうかと，つまり主体的に住民の皆さん方が，住みたい人たちがこの地域の中に集まって区割りとか，水がどう流れていたりとか，あるいは庭木もいっぱいあった方がいいねとか，そういうふうな主体的にまちづくりをした経験はあまりないのではないかと。そういうふうにして自分たちが作ってきた街であれば，自分が年老いても子どもにも魅力のある住まいになるのではないのかなと思ったりしますし，譲る時も惜しいのだけれどもぐらいの感じで大事にしていける，100 年住めるくらいの街になっていくのだろうなという感じがするのですが，これがデベロッパーに全部任せて，開発行為というのはそもそも彼らがやるものだという固定観念みたいなものがあるのです。

もう一つ，これもイギリスの話なのですが，何か農地なり地域が開発されるという時に，住民で徹底的にそれを許可するかどうかを議論されるのだそうです。そして代替案はないかとか，やむを得ない場合について開発行為を許可するということなのですが，日本の場合は地権者に内金

とか、金が下からずっと回っていると覆すのが難しいということがあります。だから、そういうのを本当は土地利用とかまちづくりについて住民主体のものをやってみながら、そうしていかないと暮らしやすさとか愛着のある街は出てこないのではないかなと思ったりするのです。どこかそういうのをやっているところがあれば、あるいは新潟市が先にやってもいいと思うのですが、モデル的にそんなのにも挑戦してみたらどうなのだろうかと、盛んに堀割だとか旧の街を一生懸命蘇らせようということで住民の皆さん方、NPOの皆さん方がやっておられますけれども、ああいうのを応用して郊外の、あるいは地域づくり、まちづくりについても生かしていったらどうなのかなという気もいたします。

(辻委員)

日本におけるまちづくりでよく出てくるのが田園調布とか国立とか、整然とした町並みのあるところなのですが、ああいうのはどういうふうにやったのですかね。

(中出委員)

あれはみんな電鉄会社です。田園調布は箱根土地という会社、東急の不動産部門だし、国立も今の国土計画の元になった会社が、国立という地名も国分寺と立川の間にあるから国立という名前をつけたという、道をまっすぐ通して一橋大学ともう一個大学を持ってきて、それはみんな阪急の真似です。

日本にもありますよ、今伊藤先生が言われたようなのは。ただし、そういうふうなまちづくりをすると、実は志の高い人がそんなにいないので、なかなか儲からないというか、成立しないのです。福島市の一つ北側に福島と合併しなかった伊達町という町があるのですが、そこに諏訪団地という団地があって、それは亡くなった建築家の宮脇檀さんの住宅生協みたいな組織で、そこで造った団地が環境共生型の都市で、自分たちでいろいろ考えてやるような都市をつくって、今もありますけれども、大部分の人が入っていますけれども、全部売れているわけではないので、結局儲からないので、要するに回転していかないのでもうまくいっていないのですけれども。面倒をみてくださった宮脇先生が亡くなってしまったりしてちょっと大変ですけれども、一度見に行かれるともものすごくいい団地だというのがよく分かります。ただ、そこに住みたいと思う志の高い人もそんなにいないという。長岡でも、長岡ニュータウンはものすごくいいところですけども、あれは隣のたいしたこと

ない区画整理と比べると1,000万高いのです。地方の人は2,500~2,600万までは払えるけれども、3,000万円を超えると払えないというような感じで、背に腹は替えられないというところがあって、なかなか大変です。東京だって同じで、いいところに住んでいる人はお金持ちだけですけれども。

(伊藤部会長)

ありがとうございました。現実はなかなか厳しいようでございますけれども、だいぶ時間も2時間以上になりまして、貴重なご意見をいただいたわけでございますが、次回に向けて石井部長さんの方からお話がございましたように、今日のご意見を一回事務局の方で整理していただいて、また、対応をご検討くださるということだそうでございます。それで、今日の議論は取りあえずこれくらいにさせていただいて、次回持ち越しということにさせていただきたいと思いますが、皆さん方の方で最後に次回までにこういう資料とか、こういうものがあつたらというご要望がありましたらお出しいただきたいと思いますが、取りあえずございませんか。

(中出委員)

次回、25日も今日と同じ部分を審議するのだとすると、申し訳ないのですけれども、新・新潟市の地図を用意していただくとありがたいのですが。僕はよそものなのでほとんど分からないというのがありますが、皆さんも少なくとも40ページにある地図だけでは、新潟全体のこと分からないのではないかと思います。40とか38にあるような地図では。テーブルの真ん中においていただいてもいいですし、窓に適当に貼っておいていただいてもいいですし、テーブルサイドでもいいのですけれども、決して都市計画図をよこせと言っているわけではないのですけれども、ものすごく分かりにくい。

(事務局)

先生、どの程度の情報の入った地図がよろしいでしょうか、それこそ都市計画図と言われましてけれども。

(中出委員)

バックに分かれてしまったがゆえに、どこがどこなのか分からないような地図になっているような気もするので。

(事務局)

これが新潟市が全部入る都市計画図ですが。

(伊藤部会長)

そういうのがあればいいですね。

(中出委員)

それがこの辺に3枚くらいおいてあって、みんなでこの場所のことを議論しているのだなというのが分かればありがたいと思うのです。幸い今日、お話に出てきた青山とか小針くらいは都市計画屋だと一応分かるのですけれども、都市計画屋でも分からないようなご説明もあると思うので。

(事務局)

この都市計画図の、2500だともうちょっと大きくなるのですが、コンパクトにした5万分の

1、これはすべてお配りできますので、数枚ではなくて配らせていただきたいと思います。

(伊藤部会長)

インフラが入っているようなのがあれば、わりといいかなと思います。

(事務局)

国土地理院の地形図に都市計画の内容を上刷りしたやつです。

(伊藤部会長)

よろしくをお願いします。

(及川委員)

先ほど札幌と仙台とについて、その都市がどのように人口増になっていって、その時に産業構造、あるいはいろいろなことがどう変わったかという資料はお持ちだと思いますので、中出先生はご存じでしょうけれども、その辺ちょっとあると。

(事務局)

政令指定都市の現状を比較したのが、前にお配りした資料の中にそれぞれの分野ごとに整理してあるのですが、時系列のものが、辻先生のお持ちのものを見させていただきながら、どの程度整理できるのか研究します。

(中出委員)

その辺で一つだけ。よく言われるのは、札幌も仙台も福岡は後背の人口が多いので、北海道全域とか九州全域から生き血を吸っているから、いくらでも伸びる余地があるのですけれども、仙台はいいとこ南東北、広島はほとんど広島県内で、山口のちょっとしか後背地がないので、同じ政令指定市でも力がだいぶ違うとよく言われていて、多分新潟がねらうのは札幌型とか福岡型ではなくて、どちらかと言うと広島とか仙台型に近くて、なおかつ仙台は田園都市に近いような構造をしていると思いますので、その辺のところも四つの政令指定市の中のどれを見本にするかというのも、事務局で内々考えていただくといいと思うのです。それぞれでかなり違いますので、福岡みたいになってもしょうがないと思うのです。

(辻委員)

静岡もできました。

(事務局)

できたばかりですと、時系列で果たしてどうか、もう少し歴史のあるところでないと。

(伊藤部会長)

ありがとうございました。

(事務局)

新潟市はこれまでにない政令指定都市と言っているものですから、モデルはあまり作らないよ

うにしている部分があります。ただ、こういう議論の中で、中出先生がおっしゃるような話はよく分かりますので、したいと思います。

(伊藤部会長)

それでは皆さん方、大変長時間にわたりまして貴重なご意見をいただきました。また来週、25日、よろしく願いいたします。どうもありがとうございました。